慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	編集後記 ; 奥付
Sub Title	
Author	秋吉, 亮太(Akiyoshi, Ryota)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2010
Jtitle	Newsletter Vol.12, (2010. 6) ,p.8- 8
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000012-0100

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究員紹介

四本裕子

脳の変化の仕組みをさぐる

2010年４月より、特別研究准教授としてグローバルCOEに参加させていただいています、四本裕子と申します。2005年に米国のブランダイス大学で博士号をとり、その後、ボストン大学とハーバードメディカルスクールにて、リサーチフェローとして、脳の研究に携わってまいりました。私の研究テーマは、「大脳の可塑性」です。神経細胞の集合体である大脳は、日々変化を続けています。繰り返しの訓練は、脳の関連部位のはたらきや構造の増強をもたらします。一方、加齢によって、脳の構造は変化するとともに、はたらきが失われることもありますが、訓練による回復も可能です。また、事故や疾患によって失われた脳機能も、リハビリテーションや時間の経過によって、ある程度回復します。そのような「脳の変化」の仕組みを、行動実験や脳機能イメージングを用いて、解明していきたいと考えています。

寺澤悠理

本塾文学部心理学専攻、大学院社会学研究科心理学専攻を経て、本年度より非常勤研究員としてお世話になることになりました。私は、嬉しい、悲しい、といった感情を経験するために、心と脳そして身体がどのように関わっているのかを、認知心理学や認知神経科学的方法（fMRI）を用いて研究しています。特に、身体の内部状態の変化に関する感覚である内受容感覚が感情を経験する心的･神経的処理において、どのような位置づけになっているのか、というテーマに興味を持っています。このような視点に基づいて、私たちの判断過程に感情が与える影響についても検討しています。健常者のほかに、脳に損傷を持つ方を対象としても、同様のテーマのもと研究を行っています。

鈴木生郎

2009年４月より非常勤研究員として哲学・文化人類学班に参加させて頂くことになりました、鈴木生郎と申します。専門は、哲学、特に現代の形而上学です。現在の研究テーマは、私たち人（person）の時間を通じた同一性に哲学的な解明を与えることです。こうした解明を与えるにあたって、私は17世紀の英国の哲学者ジョン・ロックに由来する「心理説」と呼ばれる立場に注目しています。この立場は、現在の私たちが過去や未来の自分と同一人物であることを、記憶や意図のような心の働きや、自分の将来についての実践的な推論のあり方、すなわち、私たちが備える「論理と感性」のあり方から解明しようとするものです。しかし、心理説は、多くの哲学者によって支持されているにもかかわらず、幾つもの哲学的難題を抱えています。私は、心理説の内実をより明確にすることを通して、こうした哲学的難題に一定の解答を与えることを目指しています。また、こうした試みは、私たち人の備える「論理と感性」の働きの解明に貢献することにもつながるはずだと考えています。

事務局だより

活動予定

■ 脳の講習会～基礎知識～

開催日：2010年 7月20・21・27・29・30日
　　8月2・4・6日
会　場：三田キャンパス 東館４階セミナー室・他
講　師：小嶋祥三（研究成果発信支援プログラム委員会）

■ 第9回国際プラトン学会　プラトン・シンポジウム　市民公開講座 プラトン哲学の現代的意義～『ポリテイア』（国家篇）を中心に～

開催日：2010年８月７日（土）
会　場：三田キャンパス西校舎ホール
司会（予定）：三嶋輝夫（青山学院大学）、納富信留（論理・情報班）
提題者（予定）：佐々木毅（学習院大学）、岩田靖夫（東北大学名誉教授）、
Luc Brisson (CNRS, France、国際プラトン学会副会長）、
Livio Rossetti (University of Perugia, Italy、国際プラトン学会元会長）

■ 慶應義塾大学・玉川大学・カリフォルニア工科大学共同 レクチャーコース（仮題）

開催日：2010年９月８日～10日（水～金）
会　場：三田キャンパス東館 G-SEC Lab・他
レクチャーコースステーマは、neuroeconomics（神経経済学）となります。

編集後記　2010年度最初のNewsletterをお届けいたします。
本拠点も折り返し地点を過ぎ、新たなメンバーも加わり新年度が始まりました。今回はシンポジウムやワークショップの報告が中心ですが、心理学、脳科学から哲学、文化人類学、さらには証明論のような数学の一分野まで多岐にわたるアプローチにより学際的･国際的に「論理と感性」を研究する当拠点を象徴するNewsletterになったのではないかと思っております。また、本拠点のこのような特色は、３ページに掲載されました若手研究成果報告会の様子からも十分に伺えるのではないでしょうか。
最後に、大変お忙しい中原稿を書いてくださった執筆者の皆様に厚く感謝申し上げます。（秋吉亮太）

プレスリリース情報

赤ちゃんの脳は４ヶ月で母国語にチューニングされる ――発達脳の適応性、潜在能力を可視化――

慶應義塾大学院社会学研究科の皆川（河合）泰代特別研究准教授は、人文グローバルCOEプログラムとその連携機関であるフランス高等師範学校（ENS）および理化学研究所との共同研究により乳児の脳発達について次の成果を発表しました。日本人の４ヶ月児が母国語、非母国語（英語）、情動音声、サルのコール、合成音を聞いた時の脳反応を近赤外分光法で測定した所、４ヶ月児は母国語に最も強い左半球優位な脳反応を示す一方で、サルのコールにも両半球で広い脳活動がみられました。生後間もない赤ちゃんの脳はどのような環境にも適応できる様々な潜在能力を秘め、発達と共に生まれた環境に脳をチューニングしていきますが、今回の結果は４ヶ月で母国語に適した脳内機構が出来ていることを示します。一方、成人ではサルや動物のコールに弱い脳活動しか得られませんが、４ヶ月児はまだ異種のコミュニケーションコールに反応する脳の柔軟性が残されていることを示唆します。
この成果はCerebral Cortex誌に掲載予定、電子版では５月23日に掲載され、６月３日に慶應義塾よりプレスリリースを行い、朝日新聞、日経産業新聞など各紙で広く報道されました。

慶應義塾大学　論理と感性の先端的教育研究拠点
Centre for Advanced Research on Logic and Sensibility
Newsletter 2010. June. No. 12

発行日　2010年6月30日
代表者　渡辺 茂
〒108-0073　東京都港区三田3-1-7　三田東宝ビル7F・8F
TEL：03-5427-1156
FAX：03-5427-1209
keiocarls@info.keio.ac.jp
http://www.carls.keio.ac.jp/